

茨城県
教育
研究会

会 報

第172号

＜「カリキュラムマネジメント」の研究と、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善＞

特集 「教育座談会」「提言」

平成28年10月6日
 茨城県教育研究会
 代表者 田邊 一男
 事務局 水戸市大場町933-1
 教育プラザいばらき内
 TEL 029-269-1300
 FAX 029-269-1304



心の花を咲かせよう (神栖市立息栖小学校)

学校じまんプロジェクトで培ったもの



茨城県教育研究会副会長

立野 健二

「今年は『元気と勇気・やる気』に加えて二本の『き』を植えましたね。」一学期終業式の式辞で投げかける「本気と根気！」と子供らの明るく元気な声が返ってくる。

本校は、全校児童七二九名の大規模校。教員も子供も五本の『き』を合い言葉に、諸活動で「SUPER自慢の学校」を目指している。

市の支援のもと「学校じまんプロジェクト」を立ち上げて三年。最も力を注いでいるのが特別活動の充実だ。学校行事の運営体制と、児童会組織の改変を試みた。その一つが「運動会」である。「与えられた」運動会からの脱却。全児童の意見をもとに話し合いによって掲げたスローガン、『走り出せ勝利のカギは5つの気』。元気が出る。代表児童による開閉会式の企画・運営。高学年児童全員が希望により取り組む係活動。勇気ある取組が光る。子供らのアイデアがちりばめられた学年・紅白種目は、正に圧巻、やる気が全開となる。大

規模校ならではの醍醐味だ。子供らは自分の役割や目標に向かって本気になって取り組む。根気強く頑張り抜く。グラウンドには、終日子供らの笑顔が輝いた。

子供らは自ら「創り上げる」運動会を通して、主体性と自己有用感を手に入れ、所属感や充実感を高めた。実施後の保護者アンケートには、「子供たちの一生懸命な姿、成長ぶりに感動した。」「組体操は、子供たちの好きな曲やダンスで表現され素晴らしかった。」等の感想が寄せられた。

子供主体の活動を展開するには時間も手間もかかる。綿密なリサーチとプランニングが求められる局面でもある。しかし、得るもの大きさは計り知れない。

一学期を終え満足気な子供たち。将来を担う子供たちを育てる仕事は面白い。豊かな心・人間性を育成する取組にゴールはない。我々は、子供に自信を、教員に誇りを、学校に活力を求め続ける。

提 言

各園・学校では、「カリキュラムマネジメント」の研究と、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善に取り組んでいるところ です。

今回、私たち現場の教職員に向けて、取り組むべき課題や目指すべき方向等について、本県教育界を代表するお二人に、熱意あふれるご提言をいただきました。



授業力を磨く

～児童生徒の目線に立って～

茨城県教育庁学校教育部長 森 田 充

私は、若い時代、多くの優れた授業を観ながら、授業を磨こうと努力してきた。同じ学校の先輩の授業、県内各地の研究校（永年継続研究している学校がいくつもあつた）、県内外の附属小中学校、有名研究校の研究発表会に、できるだけ参加させていただいた。授業を観ると、単元構成、一時間の構成、授業の進め方・発問などに衝撃を受け、さらに児童生徒が自ら考え、真剣に学び合い、議論し合う姿に感動したものである。このような授業を自分の理想の授業とし、いつか自分もと努力していたが、今思えば、これらの授業は、まさに A L（アクティブ・ラーニング）であったように思う。

そして、参観した授業を真似してみようと授業の準備をしていると、授業者の教材研究の深さ、教師としての思い、児童生徒の学習の視点に立った授業構成や進行の素晴らしさに改めて感動したものである。形だけの真似では、決してできない授業であつた。

しかし、授業を参観させていただくと、先生方が悩んでいると、うかがうことが少なくない。その悩みは、学び合う場面を作っていないものの、一部の児童生徒だけが話し合っていたり、発言が得意な児童生徒が活躍したりする授業になつてしまい、話し合いが深まらず、全員を学習のねらいにうまく向かわせられないということである。

A L は、全ての児童生徒の主体的な学びを引き出し、相互に作用し合うことで、学習のねらいを実現させ、深い学びをもたらすためのものである。いくら話し合う場面を設けても、何をどう学ばせ、ねらいの実現に向かわせるのか、教師の意図とゴールが明確でなければ、A L の実現は不可能である。望ましい A L を実践するには、

- ・ 十分な教材研究
- ・ 児童生徒の学習（学習の進み方、考え方、つまずき等）の予測と一人一人への適切な指導力

の二つが必要であり、これらを基本にして、児童生徒の目線から授業づくりをすることが、最も重要

であると考えます。

このことを、授業づくりの際の留意点として述べると、次の五点になる。

① 本時のねらいを明確にする。

主体的に学ばせるためには、児童生徒が解決したいという意欲が湧き出る問題を用意し、さらにその問題にどう出会わせるか、工夫しなければならぬ。しかし、あまり時間をかけすぎたり、懲りすぎたりするのは、児童生徒の活動の時間を減らすことになるので注意したい。また、教師は、本時のねらいを、「〇〇のように説明できる」「〇〇のように書ける」など、児童生徒の姿でイメージすることが重要である。こうすることが、児童生徒の学びのプロセスを考えていくことや、適切な評価をすることにつながるのである。

② 児童生徒の考え方や活動の向かう方向、つまずき等を予測する。

児童生徒一人一人を思い浮かべながら、「あの子はこうするだろう、こんなつまずきをするかもしれない」などと、できるだけ具体的に予測することが大切である。この予測が、主体的な学びを促す働きかけの基礎となる。

③ ②での予測に対して、手立てを具体的に準備する。

主体的な学びを促すためには、児童生徒に任せっきりにするのではなく、一人一人の学習状況に

応じた適切な働きかけが必要になる。このとき、つまずきに対しては、正解を導く手順を示すのではなく、誤りの原因や、正解を導くものになることに気付かせる問いかけを準備するようにしたい。

④ 話し合いを構想する。

②で予測したことをもとに、どのように話し合わせれば全員の理解を確かにし、より深い学びに結びつけられるのか、予め構想しておく必要がある。そして、その構想に従い、話し合いを進めるための具体的な発問や指示等を準備しておくことが肝要である。

⑤ 評価の問題は、ねらいの実現状況を見取れるものにする。

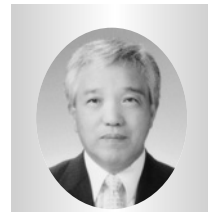
評価の問題は、できるかできないかの結果だけではなく、ねらいが実現しているか見取れるよう、その問い方には十分留意しなければならない。

最後に、①から⑤までのことは、指導案に表現すべきである。表現するために教材研究は深まり、普段から児童生徒の学習を予測することや、教師の指導の手立てを考えることに注意深くなり、授業力の向上に結びつく。授業も自信をもって進められるようになる。

そして、以上のことを協働で行い、みんなで考えたことがうまくいったかどうか吟味し、確実な授業の知見としてまとめていくのが、授業研究である。意図通

りにいったのか、いかなかったのか、と同時に、なぜうまくいったのか、いかなかったのか、を分析し、話し合うことが、確実な授業力に結びついていく。

- ・授業力は、自己研鑽と
- ・優れた授業実践を参観する。
- ・授業を開き、多くの先生方に



次期学習指導要領でアクティブ・ラーニングが強調されることへの思い
 — 今、行っている授業を踏まえて層の改善・充実を —
 常陸太田市教育委員会教育長 中原 一博

現在、本市では児童生徒が将来就きたい職業を見据え、自己実現に向け、その基盤となる生きる力（確かな学力・豊かな心・健やかな体）を確実に身に付ける支援、所謂「夢育」を教育指針として学校教育の充実を図っている。

ただ、児童生徒が社会に出て活躍する頃は、想像も付かないくらいIT化やグローバル化が進展し、仕事の種類も内容も今と相当変わっていると思う。そのような社会を生きていくには、課題を主体的に受け止め、能動的に解決していく力が今以上に必要になる。そのため、学校教育には、このような状況を認識し、各教科等の学習を通して児童生徒が主体的に学び、課題を解決する能力をしっかりと身に付ける支援が求められるこ

参観してもらい、意見を頂く。日々の授業について語り合う。

すべての先生方の授業力が向上し、すべての児童生徒の学力が向上することを願っている。

次期学習指導要領でアクティブ・ラーニングが強調されることへの思い
 — 今、行っている授業を踏まえて層の改善・充実を —
 常陸太田市教育委員会教育長 中原 一博

とになる。次期学習指導要領で主体的な深い学び、アクティブ・ラーニングを強調する要因はこの辺りにあると思うが、学校がこの学びの在り方に向き合う際、心したいことの一つを述べてみたい。

◇学校全体でアクティブ・ラーニングに向き合う態勢づくりを
 これまでの教育の変遷を振り返ってみると、「ゆとりと充実」や「新しい学力観」等、学習指導要領の改訂の度に教育への要請を受けて強調されるものがあつた。学校では、これらに校内研修や授業研究を通して精力的に取り組み、実践化に努めたことを思い出す。
 学校では、アクティブ・ラーニングがこれ程までに強調される背景を踏まえながら、今、実施している学習方法等を見直し、不足し

ている点や改善すべき方向を見出せるよう、まず、全ての教員がアクティブ・ラーニングに向き合う態勢を固めることが大切である。

◇アクティブ・ラーニングを進める際、まず取り組みたいこと
 アクティブ・ラーニングの強調は、学校教育の本丸である学力向上に繋げる学習方法、所謂、学び方への提唱である。それぞれの学校、学年では、教科等によって差異はあるものの、既に学び合いや協働学習、調べ学習、問題解決学習等、アクティブ・ラーニング的な学びを実施しているだろう。ただ、発達段階や教科の特性等を踏まえた全校での体系的な取組になっているかどうかを問われると、課題があると思う。

このアクティブ・ラーニングを体系的に実施していくには、教科担任任せ、学級担任任せにすることなく、まず、教科毎にどの学年で、どのレベルまでの学び方を育てていくのかを学校全体で検討することから始めたい。

◇アクティブ・ラーニングを成り立たせる要件
 教科等の学習には、それぞれ特性があるので、アクティブ・ラーニングを成り立たせるには、教科等を繋ぎ、様々な教育活動を通して、児童生徒が、普段から次のような観点で何事にも主体的に向き合う態度や実践力、所謂、学びの土壌を培うことが大切と思う。

- ① 様々な事象や疑問に思ったことを事典やインターネット等で調べ、書いてまとめる習慣を付ける。
- ② 様々な場で自分の思いや考えを発表する経験を積み上げる。
- ③ 話し合いで自分と友達との意見の違いを捉える機会を多くもつ。

これらの活動を学校全体で意図的・計画的に仕掛けることが、教科等でのアクティブ・ラーニングを成り立たせる鍵になる。

◇児童生徒の学力の定着や学びの状況を診る評価の重視を
 現在、本市の学校では単元末テストや章末テストを活用し、児童生徒の学力は定着しているのか、学級での学力の分布はどうなっているのか等を単元毎に診る単元評価を実施している。その結果を児童生徒のつまずきの補充や、教員の授業改善に生かしている。

体系的にアクティブ・ラーニングを導入していくには、児童生徒の学力の定着状況は勿論のこと、学習に向かう態度や学び方の状況を、今以上にしっかりと見取っていく必要がある。即ち単元目標等に照らした評価の重視である。
 アクティブ・ラーニングだけが一人歩きし、活動あつて学びなしということにならないためにも、アクティブ・ラーニングを重視する単元や時間等、学習内容をはじめ学習方法や手段等を、教育計画にしっかりと位置付けて置く必要が

あると考える。今回の改訂で、もう一つ強調されるカリキュラム・マネジメントの原点はここにあると言えよう。何よりもこまめな評価の実施で授業改善を。

◇アクティブ・ラーニングの定着には、教員の指導力が
 児童生徒が主体的で協働的な学習を通して思考をより深め、より広め、より高めていく学びとしてアクティブ・ラーニングを定着させるには、何よりも教員の指導力の向上が求められる。

その指導力を振り返る一例として、◆児童生徒が話しやすい雰囲気の学級を作っているか。◆児童生徒の多様な考えや意見を整理し、次の発問や展開に生かしているか。◆アクティブ・ラーニングに関し具体的なイメージをもち、いろいろ工夫して活動を仕掛けているか等が挙げられるだろう。

「教育は人なり」と言われるように、授業を仕掛けるのは一人一人の教員であり、学び合える学級になるか、質の高い授業になるかは、それぞれの教員の指導力に依るところが大である。従って、これから学習に纏わる様々な要因等のバランスに考慮しつつ、今の授業の実態を踏まえた上で、アクティブ・ラーニングをはじめ学びの在り方に関し、校内研修や授業研究を通して全教員が納得いくまで大いに議論されるよう期待する。

■教育座談会■

『「アクティブ・ラーニング」の
視点からの授業改善』

平成28年8月4日（木） 於 教育プラザいばらき

確かな学力の習得
と活用する力の育
成をめざして茨城県教育研究会副会長
佐藤 和男

本年度の教育研究会の研究目標は、「社会に開かれた教育課程」と、「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」についての研究に取り組むことです。

今回の教育座談会には、県内各ブロックより推薦されました五名の先生方にお集まりいただき、「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」について、今年度も教育座談会を開催することができました。

話し合いは、今日的課題を反映し、各学校が抱えている課題とも直結しており、五名の先生方の発表から、各校での熱心な取組の様子が伝わってきました。発表された実践は、他の学校においても必ず参考になると思います。

次期学習指導要領改訂のポイントの一つに、「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」があげられています。この視点は、知識が生きて働くもの

として習得され、必要な力が身に付くことを目指しています。そのために、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の視点に立った、不断の授業改善が求められています。

本座談会では、初めに「なぜ、アクティブ・ラーニングの視点による授業改善が必要なのか。アクティブ・ラーニングで何を指すのか。」について共通理解を図った上で話し合いがなされました。その後、校内研修や実施体制等、それぞれの学校での取組について具体的に意見交換がなされました。本日の発表から、アクティブ・ラーニングの視点による授業改善が積極的・先進的に実践されていることを実感することができました。今後は、各学校での取組と課題を共有しながら、論議していくことが一層大切となりますので、五名の先生方の取組を参考にしながら、各学校での実践に生かしていただくことを期待しています。

本研究会が、会員相互の研修や活動の拠点として教育実践に役立つ活動を目指す上で、今回の座談会は意義深いものとなりました。和やかな雰囲気の中、自由に本音で意見交換ができたことに対して、司会の児島校長先生、企画員の校長先生方に改めて感謝申し上げます。

■司会者

児島 裕治

(石岡市立石岡小学校)

■出席者

草野 敦子

(東海村立中丸小学校)

石川 武志

(日立市立日高中学校)

大友 恵美子

(行方市立麻生小学校)

岡野 晃生

(牛久市立下根中学校)

倉持 靖子

(常総市立玉玉小学校)

■主催者

茨城県教育研究会会長

田邊 一男

茨城県教育研究会副会長

小島 睦

櫻村 毅

立野 健二

高田 和信

佐藤 和男

支部代表

上田 壽行

寺門 正夫

鬼沢 庄司

近納 代幸

研究部代表

仁平 良治

添田 智

(敬称略)



児島裕治先生

各学校での授業改善の取組

司会

現在、次期学習指導要領の改訂に向けて検討が行われており、これまでの知識を習得するということなどに加え、課題解決に向けた主体的・協働的で、能動的な学びとなるよう授業を革新・充実させ、学びの質を高めていくことが求められています。

そこで、本日のテーマ「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」について話し合い、今後の参考にしていただければと考えていますので、自由闊達なご意見をお願いします。はじめに、それぞれの学校での授業改善の取組についてご紹介させていただきます。

草野

本校では、「安心と潤いと活力のある学校」を基本テーマに、一人一人が輝く活力ある学校づくりを推進しています。

具体的には、校内研修の中心に国語科を位置付け、「自分の考えを適切に表現できる児童の育成」を研究課題とし、「書く

能力」「話す能力」を身に付ける指導について研修を進めています。

また、国語科の研究と関連付けながら各教科等においても授業改善を図っています。例えば、「算数科における少人数指導及びスタディ・サポーターの活用」、高学年における教科担任制の実施、汎用的能力を育む「総合的な学習の時間における問題解決的・体験的な活動の実施」、人間関係構築力と社会参画の意識を高める学級活動などです。

これらの取組を通じて、子どもの自主性・自立性を育む教育を展開しています。

石川

本校では、教員の指導力向上と生徒の自発的学習態度の育成を目指して研修に取り組んでいます。

数学科では、昨年度まで「学力向上チームプロジェクト訪問」の指定を受けて授業改善を行ってきました。今年度は、「言語活動の充実」を図ることや「分かる」を実感できる授業展開(少



石川武志先生

人数、T、T、ICTの活用)を工夫するなどして、高め合う学習集団づくり、自分の考えを表現できる生徒の育成を目指して研修に取り組んでいます。

また、メンター制を取り入れ、チームを編成し、相互授業参観なども行っています。若手の教師が、発問・板書・意見の取り上げ方を学ぶことができ、授業改善につながっています。

大友

本校では、平成二十六年に、国語の授業力ブラッシュアップ研修の重点校として、単元を貫く言語活動を充実させることで、児童の主体的な読みを促し、目的に応じて的確に読む力を育成するための授業改善に取り組んできました。

そして、二十七年度は、それまでの研究の継続と発展を図り、「麻生小学校授業スタイル」として、国語のみならず、他教科にも実践の幅を広げ、話し合い活動と主体的な学びの授業改善に取り組んできました。二十八年度は、これまでの研修を踏まえ「アクティブ・ラー



大友恵美子先生

ニングの視点に立った教科指導の在り方」、副題として「ICTを活用した学習指導の工夫を通して」というテーマで、各教科で校内研修を行っています。

岡野

本校では、授業を核とした学校づくりを目指しています。授業を通して、「学力向上」と「心の教育」の二つの課題を解決するため、日々の授業の中で協働的な学びを展開しています。

すべての生徒に深い学びを保障することを実現するために、次のことを実施しています。一つ目は、「授業づくりの評価規準表」「授業づくりの手引き」を活用し、全職員で目標及び授業づくりの視点を共有化することです。二つ目は、授業参観を日常的に行うことです。職員は、空き時間に授業参観をし、教師の指導の方法や生徒の学んでいる様子を実際に見て全職員で共有しています。三つ目は、月一回の授業研究を実施し、生徒の学びの事実を生徒の表情を基に、語り合うことで、教師同士が互いの悩みを語り合い同僚性を構築することです。

倉持

本校の地区は、昨年度に「関東・東北豪雨」による鬼怒川水害により、甚大な被害を受けました。児童は、家庭も学校も被害に遭い、物心両面で痛手を負



倉持靖子先生

いきました。そこで、学校再開直後からは、水害に負けない「たくましい心」、不自由を「がまんする心」、困ったときはお互いに「助け合う心」、復興を助けていただいた方達への「感謝の心」の育成を図ってきました。本年度は、「心の育成」と共に、「たくましさ」や「助け合い」「感謝」を児童が自分たちで表現し、学校生活や家庭生活の中で「実践・実行」できるようにすることを学校運営の柱としました。特に「たくましさ」は、教科・領域等学校教育活動全体において実践できるように、その都度、共感したり賞賛したりしながら、思いを形にすることのできる児童の育成を図り、児童一人一人が誇りをもつことを目指しています。また、本校の課題である児童のコミュニケーション力の育成にも重点を置き、組織目標を「根拠をもとに自分の考えを分かりやすく話すことができる力の育成」とし、学習指導と学級経営の両面から授業改善に取り組んでいます。

今、なぜ、アクティブ・ラーニングなのか

司会

具体的には、全教科・領域において、児童一人一人が自分の意見や考えを分かりやすく話し、交流し、互いに認め、励まし合うことで、喜びや嬉しさ楽しさ等を授業の中で数多く味わえるようにしています。

各学校での授業改善に向けての紹介がありました。どの先生方からも「主体的、対話的で、深い学びをいかに実現していくか」の視点での取組を進めているといったことが共通点としてあげられると思います。それでは、なぜ、アクティブ・ラーニングの視点による授業改善が必要なのか。アクティブ・ラーニングで何を指すのか。それぞれの学校での現状等を踏まえての考えをお話してください。

草野

本校は、教育環境に大変恵まれ、東海村独自の教育が展開されています。一方で、「自己肯定感が低い」「挑戦意欲に欠ける」などの課題があります。そこで、アクティブ・ラーニングで、次のことを目指すことにしました。

第一に、自分の考えを適切に表現できる児童の育成です。校

内研修の中心に国語科を位置付け、児童の主体的・協働的な学びを引き出す指導計画の改善と教材研究の充実を図ることで、児童の思考力・判断力・表現力等と学びに向かう力を育みます。

第二に、一人一人の子どもが判断の根拠や理由を示し、自分の考えに自信をもって発表・発信できるようにすることです。国語科以外の各教科等の授業で、主体的・協働的な問題発見・解決の場面を積極的に取り入れ、思考力・判断力・表現力等と学びに向かう力、人間性等を総合的に育みます。

最終的には、本校の組織目標の「児童が自分の考えを伸び伸びと話すことができる学級・学校づくり」を目指します。

石川

「生きる力」が重要視されていて、「知識の量」だけでなく「知識を活用する力」を育成する必要があります。教員から、知識を伝達するだけでは「確かな学力」の定着とは言えないので、学校の教師全体が、アクティブ・ラーニングを意識して、授業の中で子どもたちが「考える」「自分の意見をもつ」「活動の時間をもつ」ことを意識して取り組んでいます。

大友

本校の児童は、教えられたことを素直に受け入れ、理解する

力はあるのに、学びに対して受け身で、やや難しい問題を与えられると、自力解決に消極的になる傾向にあります。また、ペアやグループでの話し合いの仕方についても取り組んでいるのですが、自分の考えを説明することに對して、苦手意識をもっている児童もまだまだ多い状態です。そのため、アクティブ・ラーニングの三つの視点「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の実現は本校に必要なだと考えています。

岡野

本校では、数年前から一斉授業ではなく、協働的な学びを取り入れ、分らないことがあつたら、お互い聞き合ったり関わり合ったりする授業づくりに取り組んでいます。

本校で、協働的な学びを取り入れた最初の目的は、生徒の人間関係を作つていき、学校生活を楽しく送れるようにすることでした。授業時は、教師の指導はあるにしても、活動の時間は生徒に任せようになっています。生徒同士で支え合っていくことが大事だという姿勢を全ての職員が理解して、共に学び合える学習集団を育てることに取り組んでいます。

倉持

本校の課題は、児童が、自ら学ぶというより、先生が教えて

くれるという意識で授業に取り組みがちだということです。そこで、児童が自ら学びに向かい、「できた」「わかった」という喜びをより強く感じられるように、児童が主体的に学習に取り組むアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が必要だと考えるようになりました。

本年度は、その基礎作りとして、各教科で判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べるということに重点を置いて、指導しています。特に、学級活動は、本校の課題であるコミュニケーション力を育成する大切な機会であると捉えています。そして、一單元または一時間単位の R P D C A サイクルを繰り返した各教科における児童主体の授業展開に生きるようにしていきたいと考えています。

アクティブ・ラーニングの視点による不断の授業改善

司会

アクティブ・ラーニングの視点による授業改善に向けた校内研修や実施体制等について、それぞれの学校でどう取り組まれているのか進捗状況についてお話ください。

草野

本校は、計画的・組織的に校



草野敦子先生

内研修等を通じて国語科の研修に取り組んでいます。

年間合わせて五回の校内授業研究会や要請訪問指導等において、一人一授業公開・相互授業参観と授業後の研究協議、講師の講話を聴く機会を設けています。

他に、先進校の視察とその報告会（共有）の開催、全職員による先進校の授業実践をおさめたDVDの視聴、先進校の取組を参考にしての自校化（教材開発）等に取り組み、授業改善に向けての教職員の意識改革を進めています。

また、国語科以外の各教科等においては、国語科における研究の成果を関連付けての指導を行いつつ、各教科等のこれまで（過去の）授業実践におけるアクティブラーニングの視点の自覚化と、目の前の子どもたちの変化等を踏まえて、指導方法を不断に見直し、改善を図っています。

大友

本校の取組の一つ目は、「麻生小学校授業スタイル」の実践です。各教科の単元では、何をどのように学んでいくのか学習計

画を立て、何が出来るようになったかを振り返らせることで学んだことの可視化をしています。授業では、本時の課題を提示し、授業の流れ（自力解決・ペアまたはグループ・全体・まとめ・振り返り）と時間配分を見通し、見直しをもてるようにしています。

二つ目は、ブラッシュアップ研修で培った国語での取組です。単元の始めに、教師が、グッドモデルやパッドモデル・不完全モデルを示し、単元を貫く言語活動で、何をできるようにしていくのかを児童に提示しました。

また、各学年の発達段階に応じた説明文の学び方をまとめたシートを入れた「説明文とらの巻」のファイルを積み重ねたり、説明文と物語文の読み取りに必要な重要語句を教室の側面に掲示しておき、自力解決のヒントにしたりしています。

三つ目は、校内研修の持ち方です。本年度は、全学級で研究授業を行う予定です。一学期は、算数・社会・音楽・体育・学活・外国語活動で研究授業を行いました。

倉持

本校でもやはり、アクティブラーニングを進める上で、校内研修の体制づくりのためには職員の意識改革が一番重要なのではないかと考えています。

学校が小規模で職員数も少ないので、研修の目標及び目的を明確にし、全職員が必要感とやりがいをもって研修に取り組めるよう進めています。

特に、アクティブ・ラーニングに向けて新しいことに取り組むというのではなく、今までやってきたことを振り返り、主体的で、対話的な深い学びにつなげたり、学びの質を上げたりするためにはどうしたらよいかについて見直しを図るようにしています。

授業改善に向けての校内研修では、研究部で「何を・いつまでに・どのように進めるか」という話し合いを積極的に進め、全職員で共通理解、共通実践を図れるようにしています。

司会

それでは、中学校での取組の進捗状況についてお話ください。

石川

例として、技術・家庭科（技術分野）について説明します。

「ものづくり」の活動の中に、生徒がグループで、「設計に無理はないのか」「強度は保てるのか。」等の製作する上での問題について、話し合う場を設けました。自分らしさを発揮する場面（主体的な学び）、意見を交換する場面（深い学び）、お互いに協力する場面（対話的な学び）を設定できました。

同じく、技術・家庭科（技術分野）の「情報」プログラミンの学習には、目的に合ったプログラムの学習には、目的に合ったプログラムの学習には、目的に合ったプログラムを試行錯誤しながら作成する過程があるので、生徒達は、グループ内で活発な意見交換を行い、対話的な学びを展開していました。

岡野

本校では、年度始めの研修だけでなく、日常的に相互授業参観を行い、自主的な研修に取り組んでいます。

授業参観では、授業の進め方だけでなく、生徒の学びの様子を観察するようにし、放課後は、担任と教科指導の担当者で、一人一人の生徒にどんな指導をしていたらよいかについて話し合っています。

学校全体で重視しているのは、日々の授業を大事にするということです。「生徒を大事にし、協働的な学びの授業を積み重ねていけば、生徒は成長していくだろう。」という考えに基づき、日々取り組んでいます。今後の課題は、「自ら学習活動を振り返って次につなげる」こと



岡野晃生先生

とがうまくできていないので、その課題を解決していくことです。

アクティブ・ラーニングの視点を踏まえての授業改善の実践について、具体的にお話してください。

草野

国語科では、課題の解決に向けて自ら本に手を伸ばし、情報を活用したり、互いの読みを交流・発信し考えを深めたり広げたりする学びを大切にしながら、「書く能力」「話す能力」を身に付けさせるための授業づくりに取り組んでいます。

そのための授業改善の五つのポイントがあります。一つは、付けた力を明確にすることで。二つ目は、主体的な課題解決を促す学習過程を工夫することです。三つ目は、教師自作の言語活動のモデル提示です。四つ目は、交流の必要感とよさを実感できる場の設定です。五つ目は、振り返りをしっかり行うことです。

総合的な学習の時間では、共通の体験活動から価値ある課題を発見し、自力解決・協働解決を行い、全員で共有した後、地域への提案も行うという学習プロセスで展開しています。また、体験的な活動を通して、身近な地域社会とのつながりに気づき、自らの人生や社会をよりよく変えていくことができる

う実感を感じ一人一人がもてるような学習にしていこうとしています。

司会

草野先生の「授業展開や単元づくり」の視点からの実践発表がありました。これらは、アクティブ・ラーニングの視点による授業改善を進める上での重要な課題になってきそうです。それでは、引き続き、先生方から授業改善の実践について紹介をお願いします。

倉持

深い学びを得るためには、児童一人一人がしっかりと意見をもつことが大事です。そのためには、児童一人一人が教師や友達から大切にされなければなりません。つぶやきを拾ってもらったり、意見を認めてもらったりするからです。その基盤を確かめた上で、アクティブ・ラーニングを進めています。

次に、国語と算数の授業スタイルについて説明します。

国語では、児童の主体的な学びを促すため、単元の導入時に、身に付けるべき力と、どんな言語活動をするのかということとを明確に伝えます。そして、グッドモデルを示すなどして、児童が見通しをもって学習できるようにします。また、話合いの観点を明確に示した交流活動を行ったり、児童のつまづきに応じ、バッドモデルを効果的に

示したり、教師の発問で揺さぶりをかけたりしています。

算数では、一人学習の時間を十分に取り、分かることと分からないことをはっきりさせた上で、ペアや少人数のグループで比較検討し、全体で意見の交流を図ります。その際、ホワイトボードやます目入り画用紙等を活用します。振り返りは、自分の言葉でまとめをし、教師の言葉を添えて次時への学習意欲が高まるようにしています。

大友

「玉小コミュニケーションム」では、どんなことを話題にしているのですか。

倉持

最近では、「夏休みの宿題は、早めに終わりにした方がいいのか。」「夏休みに行くなら山と海どっちがいい。」「という簡単な話題を取り上げました。誰もが意見を持ち、根拠をもって発表できるようにしています。

大友

それでは、「対話的な学び」のための取組についてお話しします。はじめに、ペアやグループの話合いは、自分の考えを整理するためであり、学級全体での話合いは、多様な考えを知るためであることを児童に伝えました。次に、話合いの進め方については、教師がやって見せたり、手引きを作ったりしました。そ

して、話合いは、言葉のキャッチボールなのだということや時間になるまで話合いをやめないことを繰り返し指導しました。

全体の話し合いを成立させるためにしたこととは、児童全員が参加できるように、どんな意見でも受け入れてもらえる学級づくりに努めることでした。

「主体的な学び」については、指導方法や導入を工夫し、児童の知的好奇心を喚起するような課題提示を心がけています。

岡野

教師が授業に臨むときには、何を教えるのか、児童にどんな力を付けたいのかははっきりさせておく必要があります。また、一方的に伝えるだけでは、生きて働く知識になるとは考えられません。「深い学び」ができていけば、日常生活の中で知識や技能を生かせるし、社会の事象を数理的に捉えることができるようになるはずです。

そこで、一次関数の授業では、携帯電話のお得なプランを求める問題を作成しました。問題を提示して、生徒がグループで考える時間を設けました。グループごとの話し合いでは、「どれがお得かは、分からない。」「話す時間によって、お得なプランは変わるよね。」などの意見が出たので、全体でそれぞれの疑問について話し合い、疑問

を共有しました。

このように生徒が、新たな課題を見つけ、解決していく活動を繰り返すことで、「深い学び」を獲得することができます。ではないかと考えています。

主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり

司会

単元づくりについて実際の具体例をお話しいただきたいと思っています。

石川

技術科で、全員のものをどうやってチェックするかということが話題になりましたが、グループの中の柱となる生徒を見つけて出して、その生徒を中心に学習活動を進めさせ、活動の途中途中でグループ全体をチェックするような形をとっています。また、総合的な学習では、「どうしてこの踊りが始まったのか」や「この踊りの起源はなんだろう」ということを子ども達が実際に踊る前に、書物やインターネット等でいわれなどを調べてから取り組むようにしています。知っているのと知っていないのとでは子ども達の意欲や体の動きも変わってきます。また、これは日高中で代々やっているものなんだということを子ども達同士で理解し合う。あ

るいは引き継ぎのようにするために、二年生が発表した後、一年生に小さなグループを作って踊りの指導をし、三月に引き継ぎ式を行います。それによって次に引き継ぐ子ども達も心構えが違ってくるように思います。

倉持

地域の人的・物的資源の活用ということで、本校の生活科及び総合的な学習の時間についての取組を紹介させていただきます。

毎年、低学年が生活科の時間に「天神囃子」「豊年踊り」を披露する学習を行っています。

「天神囃子保存会」の方々にご協力をいただき、太鼓の叩き方や豊年踊りの仕草の指導をしていただいて、地域の方々と関わりながら五感を通して体験的に学習できるようにしています。中学年になると「目つぶしの竜」という地域に伝わる創作劇を演じます。その舞台である地域のお寺を実際に訪れて見学したり、住職さんに話を聞いたりしながら劇づくりを進めていきます。また、その過程で読み聞かせボランティアの方々の協力を得て、役づくりや台詞の言い直しなど、自分の役づくりや地域について自分の考えを深める手助けをしていただいています。そのような活動を通して、自分たちをはぐくんでいる地域に対して理解を深めるとも

に、今度は自分たちが地域にできることを考えていく高学年の学習につなげています。

今年度、教科との横断的な学びへとつなげるために、高学年では、音楽科で「天神囃子の合奏」に取り組みました。「天神囃子」を再度学習し、日本の伝統文化を生かした楽器を使って演奏したり、イメージを膨らませながら豊かな曲想で合奏したりできるようにしています。

その際に「天神囃子保存会」の方々の指導や支援をいただきながらより効果的な学習が進められるようにしています。そうして、全学年が学んだことを地域に発信する場として、十一月に全校児童の家庭が集まる「三世代のふれあいの集い」で発表することで地域との連携・一体感を得られるようにしています。

人間関係形成力の不足とアクティブ・ラーニング

司会

人間性における人間関係の形成力が不足しているとアクティブ・ラーニングの導入が障壁になる可能性があるとの指摘もあります。その指摘に対する提案や実践例がありましたら紹介していただきたいと思ひます。

草野

本校では、二年前くらいから

国語科の研究と並行して話し合い活動の授業の在り方についても積極的に授業改善を進めてきました。

「話し合い活動」の中核は、自分や友達の思いを表出し合って受け止め合うところにあると思ひます。本校の場合は多数決を用いないで話し合い活動を行いました。子ども一人一人が、議題に対して様々な思いをもつてのぞむので、多数決を用いないで時間内に決めるといことが最初からうまくいくはずがありませんでした。でも、子どもと担任教師は共通の目標に向かって粘り強く取り組み、より良い集団決定を目指して授業を創っていきましました。子ども達は、他者に対して自分の思いや考えを根拠や理由と共に明確に伝え、他者の意見に真摯に耳を傾けて聞くなど、学級の仲間のことを考えての「対話」の仕方を少しずつ身に付けていきました。自分の思い通りに決まらないこともありま

したが、十分に話し合った上での合意形成は、自分の存在価値を高めることにつながっていると確信しています。また、その話し合い活動の醍醐味は実践的な活動、いわゆる集団活動や体験的な活動となりますが、実践的な活動の過程には他者との様々な関わりが表出します。例えば、学校行事の中で特に子ども達が楽し

みにしている宿泊学習がありま

成果と課題・将来の構想

司会

先生方のご発表からアクティブ・ラーニングの視点による不

草野

本校での成果は、次の四点です。第一に国語科における授業改善を通じて、子ども達の「書くこと」と「話すこと」への抵抗感が減り、進んで自分の考えを書いたり、話したりする姿が多く見られるようになりました。第二に、各教科等において、主体的・協働的な問題発見・解決の場面を積極的に取り入れたことにより、一人一人の子どもが、自分の考えを自信をもって表現できるようになってきています。第三に、話し合い活動の授業改善を通じて、子ども達の自己肯定感や主体的に取り組む態度、社会参画の意識等の高まりが見られました。第四に、教師の、児童に育てたい資質や能力等を明確にしての授業作りへの意識が少しずつ高まってきていると感じています。

石川

今まで先生方のお話を聞いて、まずアクティブ・ラーニングという言葉を意識しすぎず、子ども達の活動を私たち教師が保障し、そういう時間を確保することが大事であるということを研修の第一歩とし、今までの研修に更にウエイトをおいていく

ことが一番いいのかなと考えました。併せまして、小学校の先生方も先進的に取り組んでいますので、まず自分の地域を見直して、小学校の先生方がここまで積み重ねてきたものを中学校でまた一からとかマイナスにはもっていかないように、小学校の積み上げをいかに中学校でできるようにしていくということが、今後の課題だと感じました。

大友

まず成果からですが、児童について完全な答えではなく分るところまで話せばいいということが定着してきました。また、全体的な話し合いはみんなから出た意見の中から一番よいものを採すということと友達が意見を言うときには、体をちゃんと向けるということは身に付いてきたかなと思います。また、自力解決のとき、何を使えばできるのかということとをまずみんなで確認することによって図とか絵を描く児童が増えてきました。教師についてですが、課題提示の仕方を工夫が見られ、普段の学習でも ICT の活用をすることが多くなりました。また、教師の説明を少なくし、児童の発言が多くなるように授業を組み立てることを心がけるようになりました。次に課題です。課題はたくさんありますが大きな課題は二つです。一つ目

は、話し合いの質を高めるといことです。全体の話し合いは、だいぶ活発になってきたと思いますが、ペアやグループでの話し合いの質を高めたいと考えています。二つ目はノート作りです。現状では、見開き二ページにまとめることが難しくなかなかなかうまくいきません。いいノートを提示して子ども達が少ないでもノート作りが上手になるようにとか、本校の国語の虎の巻のようなものを、それぞれが研究している教科で少しずつファイリングしていったらと思います。また、考える楽しさというの、味われないと主体的にできないと思うので、考える楽しさを味わえるような課題作りを教師が研修を積んでいけたらと思います。

岡野

まず、子ども達が何事にもあきらめないで頑張る姿が顕著に表れてきたなと思います。クラスや学年、学校として一つのキーワード「絆」ということで、子ども達が「下根中学校のために」という気持ちで取り組んでいます。それが伝統となつて、更にどんどん良くしていこうという気持ちで本当にやっているのが、子ども達の関わりによつていいものが維持できている一つの要因なのだと思います。自分もそうですが、アク

ティブ・ラーニングという言葉自体はつきりと理解できてはいないのですが、だからこそ教員がしっかりと学ばなければいけないし、月一回の研修だけではなくて、日々目の前にいる子ども達を見て、何が足りないのかということと教師側がしっかりと意識していかなければ多分失敗に終わってしまうと思います。ですから、いつも指導要領が変わるたびにその言葉に振り回されて終わってしまったら、そして結局また同じ言葉が出てくるといふ繰り返しにならないためにも、やはり自分たちの子ども達にどんな力を一番つけて上げたいのか、何に悩んでいるのか、教師として何が必要なのかということをしつかりとアテナを立てて、一人一人見ていくということを日々継続していくことが一番大事なのだと思います。

倉持

成果としては、話し合い活動の耕しを行っていることにより、友達一人一人を大切に聞いた聞き会える学級作りがすすめられているということが感じます。やはり自分の考えを聞いてもらえるところという児童の安心感が授業での活発な話し合いに繋がっていることを日々感じているところです。そこから、児童の自信や笑顔・一生懸命さが表れていると

感じられます。そして何より、自分で考えてみんなで話し合い活動をしていく、実践していくことと楽しいなど感じる児童が増えたということが主体的な学びへとこれから繋がっていくことを期待します。教師の姿勢としては、児童ばかりでなく、教師も話を聞くといい意識が高くなり、子ども達のつぶやきなどを聞きながら子どもの思考に寄り添って授業を展開するという意識が高くなりました。また、子ども一人一人の能力の育成を支援するという姿勢も高まりました。子どもと対話をしながら活動し、子どもと一緒に「できた喜び」を味わいながら共に学び深めていこうとする授業作りに対する意識も高まってきました。今後の課題ですが、児童の六年間を通しての質の高い学びが保障されるように、アクティブ・ラーニングの視点から、授業や学習の流れ・学び方を統一していくことが大きな課題です。学年や担任の先生が変わっても、子どもの学びは一年生から積み上げられ、同じ流れでできるようにしていきたいと思っています。具体的には、一時間の授業の中で、見通しを立て、主体的に課題の発見・解決に取り組む、振り返るといった学習過程を全学年で行えるように、「玉小スタイル」を確立するた

座談会を終えて

めに校内研修を進めています。そして、地域と密接な関わりのある学校です。子ども達が学んだことを地域社会で発揮できるようにしてほしいという願いを全職員でもち、日々研修を積んでいるところです。

司会

本日の座談会「アクティブ・ラーニングの視点による授業改善」につきまして、各学校から実践状況・推進等、いろいろな話が聞けました。とても充実した内容で実り多い座談会になったのではないかと思っています。先生方、今後とも学校と地域のリーダーとしてますます活躍されますことをお祈り申し上げます。本日は大変ありがとうございました。





新会員2年次研修

平成 28 年 8 月 18 日(木)、19 日(金)

教育プラザいばらき

二年次研修に参加して

水戸市立国田義務教育学校
橋田 裕隆

八月十九日に茨城県教育研究会主催で行われた「二年次研修」に参加させていただきました。研修では元潮来第一中学校長、錦織俊雄先生から「教員を終えて思うこと」というテーマでお話ししていただきました。ベートーベン作曲の交響曲第九番の鑑賞から始まった錦織先生のご講話は、ご自身の実体験が数多く盛り込まれ、時間を忘れ引き込まれる内容でした。

私は錦織先生の話の中で、保護者の意見を傾聴すること、また自分の中に多様な視点を持ち、さまざまな角度から子どもを見ることが大切だとわかりました。また子どもを保護者と学校で協力して育てられるように、信頼される教師にならなくてはと感じました。

その後、分散会にて「今年度までの感想及び次年度の抱負」について、代表者の発表が行われました。同期の先生から、よりよい学級にするために、さまざまなアイデアを出し、学年、学校で組織的に子どもと関わっている様子を紹介していただきました。クラスをよくしたい気持ちはありますが、方法がわからなかった私にとって、とても参考になる発表でした。またグループ協議では、私



二年次研修に参加して

常陸太田市立幸久小学校
大倉 京子

去る八月十九日に、茨城県教育研究会主催の二年次研修に参加させていただきました。

まず、茨城県教育センターの概要についてお話を聴きました。教育研究会は、さまざまな支部と連携しており、どんな活動をしているかを知ることができました。先生方が作り上げてきた伝統を、守り続けていく責任感を覚えました。

次に、茨城県教育庁特別支援教育課主査、酒井孝行先生の「教員生活の充実に向けて」という講話を聴きました。特に、生徒指導の三つの機能を生かした教育活動の実践や、児童・生徒との向き合い方についてのお話が印象的でした。児童に学ぶ楽しさを味わわせ、互いに認め合い学び合うことのできる学級を児童とともに作り上げていきたいと思えます。そして、仕事一筋は大事だとは思いますが、プライベートと両立しながら楽しく教員生活を送っていききたいです。

最後に、分散会とグループ協議を行いました。中学校の先生方しかいない中で司会だったので心細かったのですが、県北地区の中学校の先生方が温かく見守ってくださいだったので、無事に務めること



ができました。分散会では、これまでの取り組みと今後の抱負について、太田中の田村先生がお話をおっしゃっていただきました。田村先生も周りの先生方に感謝の心を持ち、初心を忘れずに児童一人一人と向き合っていきたいと思えます。グループ協議では、意見や情報を交換しながら話し合いをしました。同じ県北地区に勤めていても、中学校の先生方とかわることはあまりないので、新鮮でした。校種は異なりますが、児童や生徒のために「力になろう、支えよう」という気持ちは一緒だと感じました。

研修で学んだことを、今後の教育活動に生かしていきたいです。



新会員二年次研修に参加して

筑西市立関城東小学校

海老原 果奈美

八月十八日に行われた「新会員二年次研修」では、倉持利之先生の講話や、一学期の実践報告を聞き、意見・情報等の交換を行いました。

倉持先生の講話の中で、胸に響いた言葉があります。それは、「『失敗』は『成長』と読む。」という言葉でした。教師である私も、日々の勤務の中で多くの試行錯誤や失敗を経験し、先輩の先生方に助言指導を受けて助けられていきます。それを失敗で終わらせるのではなく、次に繋げるきっかけにすることが大切だと思いました。

また、児童に対しても、「失敗は成長」という思いをもって関わり、自信や勇気を与えられる教師でありたいと強く感じました。

第二部で行われた分散会では、下妻市立高道祖小学校の瀬端和香先生の実践発表がありました。その中で、ノート指導についての報告がありました。毎時間授業後にノートを集め、一人一人の学習中の考えや意見・気付きを看取り、必ずコメントを入れて返却するというものでした。一人一人のノートにコメントを入れることは、大変な作業かもしれませんが、基礎基本の確実な定着や次時の学習への意欲付けとなり、一人一人の児童が振り返りを通して、さらによりよいノートづくりに努めるのではないかと考えました。一学期からは、私もノート指導の創意工夫と充実に努め、児童の主体的な意欲が高まる授業を展開していきたいと思えます。

次に行われたグループ協議では、これまでの取り組みを振り返り、意見や情報の交換を行いました。それぞれの学級の様子や一学期を終えての感想を交流することで、「よりよい授業に向けて悩んでいるのは一人ではない。私の周りには、こんなにたくさん仲間がいる。」と、前向きな気持ちになり、笑顔で協議を終えることができました。

今回の研修を通して、新たな課題が見つかり、仲間との結束も強くなりました。今回学んだことを、二学期からの授業づくりや学級経営に生かし、一人一人の児童と積極的に関わっていこうと思

います。そして、自分自身が学び続けていくという思いを大切にしたい。これからも教育活動の充実に努めていきたいと思えます。

二年次研修を通して

龍ヶ崎市立八原小学校

黒田 茂紀

八月十八日(木)、十九日(金)に教育プラザいばらきで茨城県教育研究会二年次研修会が開催された。県南ブロックの研修会は十八日の午前中に全体会と分散会の二部構成で開催され、私は、分散会の司会を任せられることになった。

全体会では、茨城県教育センターの概要説明と前茨城県教育研究会副会長の井坂武先生の講話を拝聴させていただいた。学校や地域における教師の役割や、子どもとの関わり方など、ユーモアを交えながら話される姿を見て、私もこの仕事に誇りをもち、生き生きと仕事をしたいと強く感じる事ができた。

分散会では、代表者の発表とグループ協議を行った。私が参加した分散会では、取手市立取手東小学校の渡邊彰先生の取り組みを聞かせていただいた。道徳教育が児童の人格形成に大きな役割を担っていると考え、重視されていることに共感を覚えた。渡邊先生の実践として特に素晴らしいと感じたのは、教師自身の経験をもとに、自作資料を使って授業を行って

る点である。自身の専門である美術の技能を生かした資料作成の実践を見て、私も、自身の専門である国語の指導力を高めたいと改めて感じる事ができた。

グループ協議では、自分の悩みや課題、紹介したい取り組みなどについて話し合いを行った。司会として全体を見てみると、どの先生もそれぞれの悩みを抱えていること、自身の課題を克服しようとする向上心をもって仕事に取り組んでいることが伝わってきた。同期という飛び交う充実した時間となった。

今、教師には常に学び続ける気持ちをもつことが必要とされている。今回の研修で学んだことを生かし、この先も、より良い教師を目指して邁進していきたい。

感謝、そして次への挑戦

鹿嶋市立鹿野中学校

永井 愛

教員になって二年目に入り、既に五か月が過ぎようとしています。未熟な一年目、多くの方に助けていただき、何とか過ごすことができました。中学校教員としての流れを体感した今、自分に足りないものの多さを感じる日々です。

八月十九日に、新会員二年次研修がありました。講話では、講師の先生の教員生活、そして素晴らしい上司の先生や仲間との出会いについて聞き、自身の恵まれた環

境に感謝すると同時に、これから訪れる多くの事柄に対して、よい緊張感をもつことができました。続く県東地区の分散会に、司会者として参加しましたが、久しぶりに集まった同期の温かさに触れ、とても充実した時間となりました。代表者発表では、学校と自身の現状、これからの課題についての発表があり、参加されたどの先生も、心から何度も頷いていました。グループ協議では、幅広い校種・教科の先生が、生徒・教科・部活動に関する指導だけでなく、あらゆる分野を超えて、現在抱えている多くの悩みについて話し、共感し合うことができました。初任のときとは異なり、悩みや話題の内容がより濃く、具体的なものとなっているように感じられました。また、それらに対し、自身の実践や経験を踏まえたアドバイスも盛んに行われ、この一年間の互いの成長を実感することもできました。

終わりに、企画員の先生から、「心身の健康・困難に打ち勝つて疲れない心・次への挑戦」の三つが、教員としてとても大事なことだと教えていただきました。困難には打ち勝てる。しかしそれでも繰り返してやってくる困難に負けずに打ち勝ち続け、さらに自身に甘んじることなく研究と修養を重ねて常に挑戦し、生徒一人一人のために生きていける熱い教師になりたいと、決意を新たにしました。

実践研究

中央

一人一人が確かな学力を身に付ける 算数科学習指導の在り方

〈児童同士がつながり合い意欲的に取り組む授業の工夫
(ともに聴き合える授業)〉
小美玉市立玉里北小学校

一 はじめに

本校児童の算数科の授業における実態として、分からない問題に出会うと、先生の説明を待つてやり方だけを知ろうとしていたり、答え(結果)だけを知ろうとしたりする傾向がある。そんな児童の様子を見てみると、いざ一人で解決するときに、できないということが実に多くある。つまり、分かったつもりになっているのである。さらには、分からない、つまり知っているのに、教わろうとしないでそのままにしている。当然のことながら友達の考えをしつかりと聴くことができず、意欲も高まっていない。発表の仕方にも工夫が必要である。

また、算数の授業といえは、型にはまった、例えば、問題把握・見直し・自力解決・比較検討(練り上げ)・まとめ・練習等の一連の流れが主流になっていたように思う。授業は、できた児童の考えや発表が中心となりがちであったり、一問一答式の教師の誘導であったりと、一斉授業による展開

が多くあった。内容を理解していない、つまづいている児童にとっては、「分からない」と言えず、ますます算数の苦手意識が強くなり学習意欲の低下の一因となっている。

そこで、本校で取り組んでいる「児童同士による聴き合い」の授業の実践概要を紹介したい。

二 研究のねらい

教師主導の一斉授業から脱却を図り、児童同士がつながり、あたかも自分(自分たち)で解決を図ったかと思える授業を構築するために、次の項目を研究のねらいとした。

(一)コの字・グループの授業形態

を常時取り入れ、仲間聴きやすい環境にすることに留意し、児童同士、そして教師を含めて双方方向の「話す・聴く」が充実し、児童同士の互恵関係を築くことができるようにする。

(二)質の高い発展課題に挑戦し、

分らないときに聴き合うこ

とにより、児童同士がつながり、意欲的に課題解決を図ることができるようになる。

三 研究内容・方法

(一)児童に指導する学習時の約束

分らないことがあったとき、「ねえ、ここどうするの?」「ここ分らないから教えて」「どうしてそうなるの?」と仲間に聴くこと。また、聴かれた児童は、分かるまで丁寧に教えること。ただしできた児童や分かっている児童は、聴かれてもいけないのに、教えてはいけないこと。

(二)ペア・グループに関する指導

グループとしての考えをまとめたり、代表の考えに絞ったりすることなく、あくまでも個人の考えを大切にすること。そして、友達の考えを聴き合い、すり合わせて自分の考えを高めていくようにしている。

(三)質の高い発展課題の提示

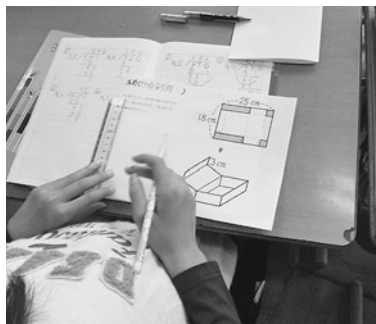
教科書の共有課題解決から発展課題を提示し、全ての児童にとって、意欲的に挑戦できるようにする。また、グループでの学びに耐えられる課題により、全ての児童の思考を停止させない工夫をしている。

【課題例】場合の数(6年)

A	
B	C
D	
E	

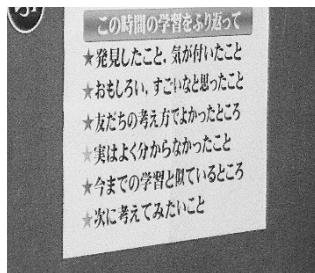
図のように A から E までの5つに分けた形を、赤・青・黄の3色でぬり分けます。ぬり方は何通りありますか。ただし、同じ色を2回使ってもよいが、とぬることとは異なります。

【課題例】体積(容積)を求め
る(5年)



(四)児童の分らないなりに寄り添う

「分かった人(できた人)発表して」という問いかけから、「分らない人いる?」「困っている人いない?」等、解決できないで悩んでいる児童やつまづいている児童が、気軽に「分らない」と言えるよう学習環境を整えるようにしている。



(五)児童の発表・説明の仕方の工夫
児童が発表するとき、最初から最後まで続けて全部発表するのではなく、「ここまで大丈夫?分らないことはない?」と途中で区切り、友達の反応を見て質問や確認をしながら発表をするようにしている。



(六)学習の振り返りをする

授業終了前の三分間を確保し、本時の学習を振り返り、記述するようにした。内容は、この学習で分らなかったこと、もっと調べたいこと、友達から学んだこと等である。

四 研究の成果

(一)コの字型やグループでの学習形態をとり、「分からなかったら友達に聴く」ことを徹底し、質の高い発展課題の解決を通して、児童が夢中になつて取り組む姿や「どうしてそうなるの?」「分からないから教えて」など、分からない・つまづいている児童から積極的に友達に質問する姿が見られ、児童が主体的に学習するようになった。



(二)振り返りをノートに書くことにより、友達の考え方から学んだこと、友達と自分の考えの違いに気付いたことなど考え方を深めることができるようになった。また、まだ分からないこと、疑問に思っていることなどを明らかにし、新

たな課題発見につながった。

(三)説明が多く、解き方を誘導する一問一答などの教師主導型の授業から脱却することにより、学習に夢中になつて取り組み態度が育っている。さらに自分の考え方の根拠を明確にして発表することにより、自らの考えを深めることができている。また、児童同士の人間関係がよくなり、学級経営にも波及している。

五 今後の課題

(一)児童の実態に合わせ、どのような質の高い発展課題を提示すれば児童の学びがより深まるか、今後の研究課題である。

(二)誤答を取り上げたり、何が分からないのかを明確にしたりするなど、児童の「分からない」に寄り添った授業展開を進める必要がある。

(三)「分からないから教えて」と聴かれた児童に対して、一方的に説明したり、答えを教えたりするのではなく、どのように友達に対応すればよいのか指導していく必要がある。

東 県

主体的に学習活動に取り組み、

自分の言葉で言葉で表現できる生徒の育成

「話し合い活動を重視した授業実践を通して」

神栖市立神栖第三中学校

一 はじめに

本校は神栖市の南東部、鹿島臨海工業地域の南側に位置している生徒数三百三十九名、十二学級(内特別支援三学級)の中規模校である。本校は平成二十五年度から三年間、「神栖市学力向上推進プロジェクト」のセンター校として、生徒が主体的に取り組み、協働的で学び合いのある能動的な学習への転換(授業改善)を図ってきた。今回はこの三年間の実践の概要を紹介する。

二 主題設定の理由

本校生徒の実態として、「学びに関するアンケート」や「全国学力・学習状況調査」の結果などから、主体的に学習に取り組んだり、自分の考えを表現したりする活動が不十分であることや数学科や英語科において、学力差が大きいことが分かった。

また、各教科の授業においても、考えを深めたり、論理的に考えたりする場面になると、根気強く取り組めない生徒の姿も見られた。このような生徒の実態から、

日々の学習に生徒がより主体的に取り組むためには、学習者である生徒にとつて「魅力ある授業」・「学び合いのある授業」を展開しなければならぬ。そこで、授業改善の柱として、課題を工夫するとともに、課題解決に向けて生徒同士が互いの考えを伝え合い、学び合う場となる話し合い活動を取り入れた授業を実践することで、主体的に学習に取り組む、自分の言葉で表現できる生徒を育成できると考え、本研究主題を設定した。

三 研究のねらい

生徒一人一人が主体的に学習活動に取り組む、学んだことを自分の言葉で表現できる力を育成するために、話し合い活動(クラスワーク・グループワーク等)を積極的に取り入れた授業の在り方を究明する。

四 研究の内容

(一)授業改善のための共通理解と
共通実践

本校では生徒が主体的に学習に取り組むため、「神三授業スタイル」としてアクティブ・

ラーニングの考えを取り入れた授業スタイルを設定し、全教科で取り組んだ。このスタイルは本研究の基盤であり、基本的な取組を次の四つの側面に焦点化し、共通理解・共通実践を図った。

- 学習課題の工夫
- 学習過程の工夫
- 話し合い活動の工夫
- 学習形態の工夫

神三授業スタイル

つかむ (課題・方法の把握)	考える (思考・解決)	深める (検証・深化)	確かめる (定着・発展)
<ul style="list-style-type: none"> 学習課題と手立ての明確化 本時の授業の見通し 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えをもつ パーソナルワーク グループワーク 	<ul style="list-style-type: none"> ペア学習 グループワーク クラスワーク 意見交換 	<ul style="list-style-type: none"> 学習のまとめ 発表 感想 自己評価

また、教師が単元計画及び生徒用の単元シラバスを作成し、掲示することで生徒一人一人が授業に見通しをもつことができる。また、より主体的に学習に取り組む生徒の育成を目指した。

また、教師が単元計画及び生徒用の単元シラバスを作成し、掲示することで生徒一人一人が授業に見通しをもつことができる。また、より主体的に学習に取り組む生徒の育成を目指した。

「神三授業スタイル」では、グループやクラスでの話し合いにおいて、生徒が司会を務め、進行する。生徒は、自分の考えをもとに、友人と協力しながら課題解決を図っていく。この際、司会の役割は大変重要になってくる。そこで、授業進行表やグループワーク（以下GW）進行表を作り、それらを全生徒に配付することにより、見通しをもつて話し合いを進めることができるようにしている。

指導の手立て	授業の工夫・改善のポイント	方法・対策
学習課題の工夫 (事象提示の工夫)	○興味・関心をもたせるもの ○多様な考えが出るもの ○適度の抵抗感のあるもの ○既知と未知のずれがあるもの	○問題発見の学習 ○指導目標 ○興味・関心の重視 ○概念の把握
学習過程の工夫	○問題解決の流れの重視 ○生徒の実態、経験の重視 ○自力解決・集団(グループ・クラス)解決の重視 ○活動時間の確保	○問題解決の学習 ○物の見方・考え方 ○調和のある学習形態 ○主体的な学習
話し合い活動の工夫	○話し合い、練り上げの重視 ○学び合い、深め合いの協議・討論 ○お互いの意見を認め合う雰囲気醸成 ○自ら進める授業の重視	○問題解決の活動 ○話し合いのスキル ○司会者等の役割 ○教師の最小限の介入
学習形態の工夫	○グループによる学習 ○小集団による学習 ○発見的・補充的な学習 ○個に応じたきめ細やかな指導	○グループ学習 ○課題興味関心別学習 ○発見・補充学習 ○習熟度別学習

自分の言葉で表現するためには、学習課題に対して自分の考えをもつパーソナルワーク(以下PW)が大切になる。さらに、PWで考えたことを深めていくためにGWを行う。他者の意見や考えから自分の考えを深めたり、修正したりするなどの工夫

自分の言葉で表現するための工夫

KSPRIDE 授業進行表

授業進行表は、授業の進め方を示しています。授業時間内には、必ず授業進行表を見ながら授業を受けてください。

話し合いの進め方
話し合いの進め方は、話し合いの進め方です。話し合いの進め方について、先生が説明します。

一人一人の考えをまとめる(PW)
一人一人の考えをまとめる(PW)は、一人一人の考えをまとめる(PW)です。一人一人の考えをまとめる(PW)について、先生が説明します。

グループで意見をまとめる(GW)
グループで意見をまとめる(GW)は、グループで意見をまとめる(GW)です。グループで意見をまとめる(GW)について、先生が説明します。

クラスで意見をまとめる(CW)
クラスで意見をまとめる(CW)は、クラスで意見をまとめる(CW)です。クラスで意見をまとめる(CW)について、先生が説明します。

授業進行表



生徒司会による学習のまとめ



付箋紙を使ったワークショップ型GW

ワークシートの工夫
・課題とまとめの整合性
思考を深める内容
学びのプロセスを振り返る内容

て、グループ全体で意見を練り上げ、学習課題に迫る話し合いを行う。個からグループへ、グループからクラスへと意見交換の場を広げていく活動を通して自分の言葉で表現する力が高まると考える。この活動を充実させるために次の三点を重視して実践した。

○学習スキルの向上
・言語スキル表、話し合いの進め方表、司会進行表
○GWの工夫
・司会力の向上、GW進行表、ワークショップ型GW
ホワイトボードの活用
(思考の可視化)

五 研究の成果

話す	○自分の考えを詳しく話す ・理由を付けて話す ・話数を表す言葉を使って話す	○自分の話を聴いて話す ・疑問を言ってから理由を話す ・つづきを待つ言葉を使って話す	○話を明確にして、自分の考えを話す ・理由を挙げて話す ・まとめ言葉を使って話す
聴く	○相手に聞こえるようにはっきり話す ・声の大きさや速さを意識して話す ・「です」「ます」を使って最後まではっきり話す	○相手にわかるように話す ・四や五、具体物を示しながら話す ・相手に同意を求めながら話す	○話を聴きながら、自分の考えを整理する ・理由を挙げたり、例を示したりしながら話す ・相手の考えを整理したり、まとめたりして話す

言語スキル表 (話すスキル抜粋)

(一) アンケート結果から
三年間の各種アンケートを比較して、最も変容が顕著であった項目は「授業が楽しい」という設問への回答であった。平成二十五年度は肯定的な回答をした割合が62%であったが、二十七年度は83%に上昇した。また、意欲的に学習に取り組む場面を選択する設問では「調べ学習や話し合いをしている時」「学習の目的や目標がはっきりしている時」を選択する割合が増えてきた。これは生徒が主体的に学習を進める「神三授業スタイル」が浸透してきた結果であると考えられる。

(二) 生徒の変容から
授業の中で話し合い活動を積極的に導入し、自分の言葉で表現する活動を進めたことにより、

生徒会や実行委員会等の話し合いにおいても、自分の考えをしっかりと伝え、折り合いをつける場面が増えてきた。

六 今後の課題

全教科において「神三授業スタイル」の目指すアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践・授業改善を行ったことで、生徒の学習への取組や各種調査の結果は明らかに改善してきている。しかし、授業スタイルが定着する一方でややもすると活動が形骸化する恐れもある。また、「自分の言葉で表現する」ことに対しても改善すべき点が見られる。今年度は、さらなるレベルアップを目指し「自分の考えを的確に表現する生徒の育成」をテーマに「的確に表現している生徒の姿」を可視化するなどの研究を行い、各教科で話し合い活動を中心とした授業スタイルの工夫と改善に取り組んでいる。

また、クラスワークにおける思考力・判断力・表現力の深まりが課題となっているので、「深い学び」と関連付けて研究を進めていきたいと考える。

南 県

「考えを伝え合う」と通じて、
自らの考えを深める学習指導の充実

～アクティブ・ラーニングの視点からの
授業改善を目指して～

牛久市立ひたち野うしく小学校

一 はじめに

本校は学校教育目標に「共に学び、高め合い、誇りをもってたくましく歩む児童の育成」を掲げ、「聴き合い、伝え合い、支え合う児童の育成」等を中期的な目標に教育活動を展開している。また、本年度の学校経営方針の重点に「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、授業づくりを基にした小中一貫教育の推進」を位置付け日々授業研究に取り組んでいる。さらに、今年度県学力向上推進プロジェクト事業「授業力ブラッシュアップ研修」重点校の指定を受け、国語科における授業力向上に全教職員が協働して研修にあたっている。以下、本校の研究の概要について紹介したい。

二 研究のねらい

中央教育審議会教育課程企画特別部会で示された「論点整理」では、学習する子どもの視点に立って育成すべき資質能力が三つの柱「個別の知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」で整理された。その資質能力を育むため

には、アクティブ・ラーニングが重要であり「深い学びの過程」、「対話的な学びの過程」、「主体的な学びの過程」の三つの視点で子どもの学びを改善すべきであると示された。これらは、本校がこれまで取り組んできた協働的な学びと同じ方向性であり、よりアクティブ・ラーニングの視点を明確にした授業づくりを充実させていくことが重要であると捉えている。そこで、今年度の研修テーマを「考えを伝え合うこと」を通して、自らの考えを深める学習指導の充実」と設定した。

三 研究の内容

(一) 基本的な考え方

○「伝え合う」とは

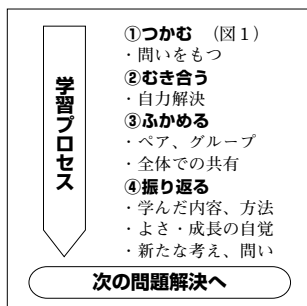
一方的に「伝える」のではなく、自分の考えと他の考えを比べながら「聴く」ことで、考えを「共有」し、「深め」、「発展」させる。そして、友達を支えることである。

○「考えを深める」とは

一つの考えにとらわれず、友達との関わりの中で多様な考えに触れ、自分の考えを見つ

(二) 深い学びの過程を意識した一単位時間の学習の流れの統一

自ら問いをもち、問いと向き合い、友達との学び合いを通して自らの考えを深めていく基本的な学習過程(図1)の統一を図った。学習の流れを示すことで児童も次の流れが分かるようになり学習に対して安心して学ぶ姿が見られ、自ら次の段階へ進もうとする意欲にもつながった。また、常時黒板に掲示することで、特別な配慮を要する児童に対して大きな支援となり、授業のユニバーサルデザイン化の視点からも意味のある取組となっている。



【基本的な一単位時間の流れ】

(三) 対話的な学びの軸となるペア・グループ活動

ペア・グループ活動については、導入する必然性、タイムラグをしっかりと検討することが重要であり、ペア・グループ活



【二年生 隣同士でペア学習】

動の目的や内容を明確にし、聴き合うこと、分らなさをつながり合う授業づくりを大切にしている。小集団での活動であるが個人を尊重し、他者との関わりを通して個を高めることを基本としている。

(四) 育てたい力を育むための適切な言語活動の設定

学びの質を向上させるためには、如何にその学習に最適な言語活動を選択するかという視点が大切である。児童の実態、育てたい力、教科のねらいを明確にし、それらに適した言語活動の位置付けを図った。

○第二学年 単元名「道具の特徴を読み取ろう」

本単元は、「読むこと」の「文章の中で大事な言葉や文を書き抜くこと」がねらいであり、言語活動として「便利な道具のおすすめカードをつくる」ことを位置付けた。おすすめカードは文章から対象の特徴を読み、ふさわしい言



【風呂敷のおすすめカード】

葉を用いて説明するものである。道具の特徴が友達に伝わるように作るという目的・相手を意識を明確にすることで意欲的に学習を進める姿が見られた。また、導入時に教師自作のおすすめカードを提示することで学習のゴールや見通しをもたせる機会となった。

○第四学年 単元名「中心となる人物の気持ちの変化を本の帯づくりを通して伝え合おう」

昨年度の県学力診断のためテスト結果から「人の気持ちを叙述に即して読み取る力」に課題が見られた。そこで、本単元では言語活動として「本の帯づくり」を位置付けた。本単元で作成する本の帯には、中心となる人物の気持ちの変化が表れている一文とその一文を選んだ理由を書くように設定した。授業では、ペアやグループで友達の多様な考えに触れたり、何度も教科書の文章に戻ったりしながら自分の考えを深めていき、一人一人が叙述をもとに想像して読む力を高める場となった。

○第六学年 単元名「新聞の投書を読んで、意見文を書く」

県学力診断のためのテスト結果から、説明的な文章を読み、制限字数内にまとめを書き表すことに課題が見られた。そこで、説明的な文章の構成を意識して読み、文脈に即して読む力を付ける手だてが必要と捉え、言語活動に「自分の意見を投書として書く」ことを位置付けた。そのために、投書について書き手の主張を捉えるとともに、構成や説得の工夫を見つけ「投書の書き方のポイント」にまとめた。事前活動として新聞の投書のスクラップを継続し、自分の意見や感想をメモする取組を行った。その中から興味あるテーマを選び、読み手や文章構成を意識し投書を作成した。

(五)見通しを持ち、主体的な学びの過程を踏まえた授業づくり

○単元導入時に学習計画づくりを位置付けている。また、活動のグッドモデルを示すことで、学習を見通す場を設定している。

○本校では、「赤丸」の記号を記して本時の振り返りをノートや学習カードに記述させている。内容としては、学んだことや方法、自他のよさや成長の自覚、新たな考え、問いなどである。これらの振り返りが次への原動力になるよう生かしている。

【振り返り記述の一例】四年 国語
「主人公の大きく変わった文（気持ち）をつかむことによって、物語の登場人物たちの気持ちが大きく見えてきた。」
「主人公の気持ちが変化する一文は人それぞれ選んだ所が違ったけど、どの文にも主人公の気持ちがかもつていた。」

五 研究の成果と今後の課題

(一) 研究の成果

○学校評価の結果から、「友達と学び合う授業は楽しい」等の項目で九割を超える児童が肯定的な回答をしている。協働的な学びを大切にした授業づくりの成果と捉えている。

○児童の実態、教科のねらい、身に付けたい資質能力を明確にし、適切な言語活動を設定し、また、児童の反応を多面的に予想しうえで様々な具体策を講じようとする授業づくりの意識が高まっている。

(二) 今後の課題

○自分の考えを伝えようとする意識は高まっているが、相手意識に課題がある。相手の話を最後まで聴く意識を高める手立てを講じる必要がある。

○教科の楽しさ、魅力を感じる課題の在り方、自ら問いをもち挑戦したくなるような課題づくりの工夫が必要である。

教育プラザいばらき

事務局だより

茨城県教育センターは、本県教育の振興・充実を図るため、県内の全小中学校が加入する自主的な研究団体の活動を支援しています。センターがある教育プラザいばらきの建設、運営に御尽力いただいている諸先輩方や、小中学校の教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

今後、茨城県教育研究会や茨城県学校長会及び関係団体と連携を深め、本県教育目標の具現化を図るため、その一翼を担う活動を支援して参ります。また、当館には、茨城県教頭会や茨城県退職校長会、茨城県退職教頭会の事務局も置かれています。

平成二十七年末をもって、坂本 瑞主幹が退任し、大内 雅司主幹が就任しました。よろしくお願いたします。



平成28年度教育プラザいばらき職員

後列左より 大内、長澤、石島、砂押
前列左より 坏、鈴木、関

本年度も、理事長を中心とした事務局体制のもとに、会の発展のため努力して参ります。

主幹（研究会担当） 大内 雅司
主事（センター・研究会担当） 石島久美子
主事（学校長会・研究会担当） 砂押 有香

「教育プラザいばらき」の運営に御理解、御支援、御協力を今後ともよろしくお願いいたします。

皆様方に「教育プラザいばらき」を快適にご利用していただくために、さらに工夫改善をしていきたいと思っております。

- 茨城県教育センター職員
- 理事長 鈴木 一司
- 局長 関 晃
- 主幹（センター担当） 長澤 洋子
- 主幹（学校長会担当） 坏 哲男

平成二十八年度

視 点

—「カリキュラムマネジメント」の研究と、
「アクティブ・ラーニング」の視点からの
授業改善—

「自分の考えや思いを生き生きと表現できる児童の育成」

常陸大宮市立山方南小学校

校長 川又 寛実

本校は、平成二六・二七年度、常陸大宮市教育研究会指定校として、国語科における交流活動の工夫を研究の中核とし、児童の表現力を育む授業づくりに取り組んできた。

一 研究のねらい

国語科の学習における効果的な交流活動の在り方を工夫することを通して、自分の考えや思いを生き生きと表現できる児童の育成を目指す。

二 研究の実際

(一) 国語科の授業づくり

① 単元を貫く言語活動の工夫

(二) 並行読書

① 交流活動を中核に据えた基本的な学習の流れ（交流活動の目的や視点の明確化）

② 交流の場の設定

③ 話し方聞き方の手引き作成

④ 可視化ツールを基にした交流活動の展開

(三) 学校生活全体での取組

① 国語科で学習したことを生かした表現の場づくり

② 言語環境の整備

三 研修体制の充実

(一) 課題研究による国語科の授業の充実のための研修

① 全担任が授業公開

② 言語活動の位置づけの工夫

③ 相互授業参観と事後検討会

④ 指導案の共同立案

(二) 外部講師を招聘した研修会

・常陸大宮市教育委員会学校
教育課指導主事の招聘
(国語科)

四 常陸大宮市教育研究会指定校発表会

平成二十七年十月二十三日(金)

「くしっこ学習スタイル」を基本とした問題解決的な学習の推進

日立市立櫛形小学校

校長 作間 忍

全校児童九六三名の大規模校である。思いや考えを表現するこ

とや学んだことを活用することに課題があるという児童の実態、また、若手教員が多いという教員の実態を踏まえ、全学年五学級という特性を生かし、組織力・チーム力を発揮した「わかる、できる楽しい授業」づくりに取り組んでいる。

一 くしっこ学習スタイル

くしっこ学習スタイルは、課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）を日々の授業で具体化するものである。四つのステップと四つの柱を位置付けている。

(一) 四つのステップ

① めあてをつかむ

② 課題の把握と学習の見通し

③ 一人学び

④ 交流する

みんな学び
自分の考えの再構築

④ まとめる
振り返り活動

(二) 四つの柱

① 言語活動の充実

② 問題解決的な学習

③ モデルや手引の提示・活用

④ 対話

二 研修を支える校内体制の整備

(一) 学年組織力を生かす

① 指導案の共同立案

② プレ授業を実施した練り上げ

(二) イントラを活用した報告連絡

(三) 職員を講師にした校内研修
・例えば、学習の見通しに焦点化した授業参観と協議

(四) 外部講師を活用した理論研修
(五) 図書館教育や読書活動の充実
(六) 板書計画を活用した研修会

「数学的な思考力・判断力・表現力を高める算数科授業改善」

「算数的活動の充実と数学的な表現方法の活用を通して」

鉾田市立鉾田小学校

校長 中村 裕幸

本校は昨年度、学力向上推進プロジェクト事業授業力ブラッシュアップ研修重点校として、「算数的活動の充実」や「数学的表現方法の活用」を中心に、算数科の授業改善に取り組んできた。

一 算数的活動の充実

(一) 鉾田市授業スタイルに基づいた授業構成

① 「つかむ・見通す」

② 「考える」

③ 「深める」

④ 「まとめる」

ペアワーク・グループワーク・クラスワークの工夫

④ 「まとめる」

(二) タイムプロットカードの活用

・一単位時間授業の流れ（学習の進め方）の掲示

(三) イメージの視覚化

・問題文から分かる情報の視

覚化（数・式・図・表・グラフ等）

二 数学的な表現方法の活用

(一) 話し合い到達目標の設定
(二) 数学的表現・キーワードの洗い出し・掲示
(三) 話し合い活動の活性化

・「グループワーク」「クラスワーク」の進め方の工夫

(四) ノートの書き方の指導

・お手本ノートの活用

(五) ICT機器の活用

(六) 算数科コーナーの充実

取組の成果として、諸テスト結果の向上、算数科指導に対する教師の自信の高まり等が挙げられる。文科省調査官より、アクティブラーニングの視点からの授業改善点として「深い学びの過程」「対話的な学び」「主体的な学び」の指導があった。常にこの視点を意識した授業実践を心がけていきたい。

「協同的な学習(学び合)」を核とする学校づくり

龍ヶ崎市立城ノ内中学校

校長 藤ヶ崎 敦

教育活動の大部分を占める授業を学校改善の軸とした、「協同的な学習(学び合い)」を核とする学校づくりを実践している。これにより、学力差の大きい全ての生徒に学習を保障する「ラーニングコミュニティづくり(共に学び合え

る集団を高める」の実現とともに、思春期の中で様々な不安や悩みをもつ生徒たちに人間関係のつながりを保障する「ケアリングコミュニティづくり」(互いにケアし合える集団を高める)の実現を目指す取組をしている。

- 一 ケアリングコミュニティづくり
 - (一) 授業で目指す生徒の姿の揭示
 - (二) めあてや意欲をもって主体的に取り組む学習課題の工夫
 - (三) 全教科・全領域で協同的に取り組むグループ学習の実施
 - (四) 学習したことを振り返る時間の確保と実践の継続
 - (五) 学習を深めるための意見や考えのつなぎ方の研修
 - (六) 授業写真を活用した毎月一回の校内授業研修
 - (七) 日々の授業における相互授業参観(授業を開く)
- 二 ケアリングコミュニティづくり
- (一) 学級満足度調査(C&S)の活用による学習グループ作り
 - (二) 絆を深めるための年2回の生徒フォローラム
 - (三) 基礎的・汎用的能力の育成を意識した学校行事と授業作り
 - (四) 生徒指導の三機能を生かした城ノ内中授業スタイルの構築
 - (五) 生徒自身による目指す生徒像の制定とスローガン作成
 - (六) 自問清掃への取組

「読み取ったことを生かして、自分の考えを表現する力を高める指導法の研究」

「説明的文章における読む力、書く力の充実を通して」

かすみがうら市立下稲吉小学校

校長 宇津野 英広

- 本校では、昨年度授業力向上プロジェクトとして国語科で「自分の考えを表現し、伝え合う力を高める指導法の研究」をテーマとして授業力の向上に取り組んできた。今年度は、さらに説明的文章における読む力、書く力の充実に絞って研修に取り組んでいる。
- 一 説明的文章を読む力、書く力を高めるための授業研究
 - (一) 県学力診断テストの分析結果確認と活用(ブロック研修)
 - (二) 計画訪問や校内研修での授業実践(学年内研修や相互参観)
 - (三) 外部講師招聘による要請訪問
 - (四) 手紙の書き方体験授業
 - (五) 読書集会との関連を図った読書活動の推進
 - (六) 夏休み各種コンクールへの参加
 - (七) 市文集「かすみがうら」への出品
 - (八) 読書量の調査と表彰
- 二 基本的な学習習慣を定着させるための工夫
- (一) 家庭学習カードの改善(学習のきまりや学び方の手順)
 - (二) 読書記録カードの改善

(発達段階に応じた工夫改善)

(三) 漢字月末テストの実施継続

三 言語環境の見直しと改善

- ・ 六年間を見通した言葉の力の揭示

四 学期ごとの確認

・ 研修の進捗状況の確認と成果と課題の把握

「自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる生徒の育成」

下妻市立下妻中学校

校長 鈴木 悟

- 本校は、一昨年度から、本校生徒の実態に応じた「下妻中スタイルの授業」を創造して、学習指導要領に示されている目標や内容の実現と学校教育目標の具現化を目指した授業を展開してきた。
- 一 研究のねらい
 - 二十一世紀型能力の育成に向けて、下妻中スタイルの授業の構築と実践を通して、学校教育目標の具現化と生きる力の実現を一体化させた授業と学習評価の在り方を探る。
 - 二 下妻中スタイルの授業づくり
 - (一) 授業の中で学習指導要領の目標や内容の実現と学校教育目標の具現化を図るため、授業内容を吟味し、授業方法を工夫する。
 - (二) 単元や題材の目標は、生きる力と学力の三要素から、「たし

かさ」「ゆたかさ」「たくましさ」の三項目で設定する。

(三) 学習課題は、学習問題と学習のめあてに分けて設定し、学習のめあては学習のめあてに帰着させる。

(四) 十分満足できる状況を見取る視点として、キーワードを設定するとともに、満足できる状況へ引き上げる手立てを用意する。

(五) 生活から授業へ、授業から生活へと環流を図るため、教材や教具、学習問題や学習テーマ等の開発に努める。

(六) 自主的で自立的な学びとなるため、問題解決的な学習または課題追究的な学習と学び合いの学習の融合を図る。

(七) 調べ学習を家庭学習へ移行を図る。

『学び合いを大切にした問題解決学習の在り方』

「算数科における思考力・表現力の育成を目指して」

境町立猿島小学校

校長 小坂 誠二

- 本校は、昨年度から境町教育研究会研究指定校、本年度は学力向上推進事業に係るプロジェクトチーム訪問校として「学び合い」を手法として、児童が「納得解を実感でき

る授業づくり」に取り組んでいる。

一 研究のねらい

体験的な問題解決学習を中心にした算数科における言語活動を取り入れた授業を展開することを通じて、児童の思考力や表現力を育成する指導のあり方を究明する。

二 研究の仮説

【仮説一】 体験的な問題解決学習を積み重ねた授業を仕組むことにより、理解したことを実感することができよう。

【仮説二】 算数科において言語活動を取り入れ、学び合いの授業を展開することにより、数学的な思考力・表現力を高めることができるであろう。

三 研究の構想

- (一) 基本的な考え方
- ① 思考力や表現力の育成
- ② 学び合いを生かした授業
- ③ 一人一人の考えを生かす指導
- ④ 多様な表現方法の習得

(二) 実践研究部における取り組み

- ① 授業研究部
 - ・ 算数的活動を取り入れた授業展開の究明
- ・ 学び合いの手法を生かした指導法の研究
- ② 環境調査研究部
 - ・ 算数コーナーの充実
 - ・ 各種アンケート調査の立案・実施・分析等
- ・ 家庭学習の内容の検討

好文亭 一文芸欄



大子町立大子中学校 木村 晴美
澄み渡る 青空の下 雲の峰
怪しき予感 もやもやと

大子町立大子小学校 同 田村 瑠美
風鈴の 涼しい音が リンリンと
心清ませ また仕事

神栖市立神栖第一中学校 飯島 誠
虹の橋 太平洋を またにかけ

神栖市立波崎第一中学校 向後 幸男
ひっそり閑 弥勒菩薩の 像を見る
中学生にも 慈悲深く居り
四回戦 シード選手に 果敢に挑む
君の二年に 悔いを残すな

取手市立戸頭小学校 鈴木 伸
雨空に 朝顔の芽 二つ三つ
傘差し 水やる 一年生

取手市立藤代中学校 倉持 貴子
師のタクト 見つめ奏でた
ドビュッシー
子らの歓喜に 臉おさえ

取手市立久賀小学校 豊嶋 史之
ひまわりと 輝く笑顔に 癒やされて
学びの広場 今日も 励もう

取手市立取手第二中学校 野本 由美
お月さま 天指す吾子と 百日紅

取手市立取手第一中学校 深澤 陽子
遙かなる 山頂目指し 歩む先
手にしたものは 絶景と友情

同 見世 一枝
向日葵の 輝き以上に 子等の顔

同 岡野 真紀子
熱き思い 共に涼風 校舎に

つくばみらい市立谷原小学校 柳下 英子
汗涙 リオより届く 秋暑し

つくばみらい市立十和小学校 高谷 道恵
蛍火に 誘われ我が子 歩き出す

つくばみらい市立福岡小学校 皆川 渉
仰ぎ見る 紫峰の彼方 夏の海

つくばみらい市立陽光台小学校 亀山 佳子
夏便り 楽しき子らの 瞳を想ふ

つくばみらい市立谷和原中学校 渡邊 貴紀
白球の 打ち上がる先 雲の峰

同 小池 剛史
ひよこりと顔出す日陰の ありがたさ

常総市立菅生小学校 青柳 博
ひぐらしの 鳴く声ききて 夏はゆく

先生何を見ているの？
常総市立水海道中学校 細田 和寿

先生何を見ているの？
先生はいつも下を見ているのね
あっ 小さなアリが大きなエサを
運んでいる！
先生何を見ているの？
先生はいつも上を見ているのね
あっ あんなすき間にスズメが巣
を作っている！
先生何を見ているの？
先生はいつも遠くを見ているのね
あっ 虹がでてる！
先生何を見ているの？
先生はいつも私を見ているのね
あっ ボタンを掛け違えていた！
先生が見ているところっておもしろいのね

ブルースト現象
茨城大学教育学部附属小学校 比佐 中
日本の裏で大也が活躍した頃
日本の隣で大地が活躍した頃
捕まえた怪物が私たちの話題
捕まえた虫が僕たちの話題
視線の先は鈍色の地面
視線の先は浅葱色の空
突然の雨
突然の雨
アスファルトにまだら模様
アスファルトにまだら模様
薄く煙がたつてくる
薄く煙がたつてくる
鼻で思い切り空気を吸う
鼻でゆっくり空気を吸う
香りが二つの時代をつないだ

編集後記

今回お届けします会報第一七二号は、本年度の会報テーマの一つである『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善をテーマとして話し合いをしていただいた教育座談会の報告を特集記事といたしました。各学校での、特色ある取組がたくさん紹介されております。これからの各学校における授業改善の実践につながれば幸いです。

また、新たに二年次研修について掲載させていただきました。

御多用のところ御提言をいただきました森田充先生、中原一博先生、教育座談会に御出席いただきました先生方、そして原稿をお寄せいただきました皆様方、心より感謝申し上げます。

なお、第一七二号は、正副委員長及び次の担当者にて編集させていただきます。

- ◎藤枝 馨子(水・常澄中)
- 檜山 浩之(水・上中妻)
- 小坪 芳克(水・笠原小)
- 栗原 和彦(水・千波小)
- 芝田 幸祐(水・内原中)
- 八木 克弘(ひ・中根小)